

# ケアマネの、システム視考 ～この先、どうなる？ ケアマネでいられるかな～

北海道で働くケアマネジャー

木村 晃子

まさかの展開！

私は、職住近接というのが好きです。きっと、私の生き立ちに関係しているかもしれません。私の父は、田舎町で高校教員をしていました。いつでも、父の勤務する学校の近くに住まいがありました。父は、朝早くから、或いは休日も学校に足を運んでいました。

また、父と買い物などに出掛けると、出先で、教え子やその保護者達と遭遇し、挨拶されている父の姿も目にしていました。そのような、田舎町の良さを感じて育ったことが影響しているのだと思っています。

平成17年に、自分の住まう町で、ケアマネジャーの事業所を自分で立ち上げました。自分の住んでいる町だからこそ、この町を良い町にしたいという思いをもっていました。ケアマネジャーとして、支援を展開することは、今の自分の地域環境を良くしていくことに他なりません。高齢者支援をしつつ、いつかこの町で暮らす将来の自分に支援を置き換えながら、日々の仕事に向き合ってきました。ずっと、ずっと、この町で暮らし続ける。当分の間、この町で仕事を続ける。そう思っていました。

ケアマネジャーの仕事は、支援を必要とする高齢者の課題（ニーズ）と、対応する社会資源を結びつける仕事です。社会資源は、制度のサービスだったり、制度外のサービスだったり。地域住民の支え合いだったり。様々な資源を繋ぎ合わせていくのがケアマネジメントです。自分の暮らす町でケアマネジャーの仕事をする、ある時にはケアマネジャーとして支援を必要とする人に関わります。けれども、ある時には、同じ住民という関係にもなります。ケアマネジャーとしてできないことも、地域住民としてならできる、ということも多々あります。

例えば、朝のごみ捨てという行為があります。ケアマネジャーとしては、ごみ捨てに困難を持った利用者に対して、ごみ捨てができるように支援の体制や協力者を探すことが必要です。住民としてできることは、自分の近隣の人のごみ捨てを代行することも可能です。職住近接であることのメリットはこのようにあると感じています。

職住近接であると、休みの日などに、仕事の関係者と顔を合わせる事が、負担に感じるという人もいました。そうかもしれません。けれども、仕事関係の人と顔を合わせたとしても、多少の挨拶程度でその場は終わります。私は、そのようなことに負担はあまり感じることはありませんでした。

このようにして、職住近接で13年もの間仕事を続けてきました。これからも、続くと思っていました。けれども、諸事情があって、この3月をもって、現職を辞めることになりました。諸事情の詳細は記すことはできません。退職を決めたのは自分自身でしたが、その決定までのプロセスは非常に不本意なものでした。しばらくの間は、喪失感がとても大きかったのは否めません。予期せぬことが時々起こってしまうものだと思いましたが、予期せぬことが起こるのも人生においては、当然のことかもしれません。

さて、ケアマネジャーという仕事を天職に感じていたものの、ついに転職を覚悟しました。何をしたいこうかと考えています。これまでの経験からすると、ケアマネジャーとして再就職をすればよいだけなのですが、ふと今まで通りの道を歩むということに疑問を持ちました。ケアマネジャーの仕事は大好きです。でも、そこにこだわらなくてもいいかもしれないと考えるようになりました。これからは、今までの経験を活かしつつ。これからの自分の人生を納得いくように歩いていこうと思っています。次号では、どんなことを書いているのか、3か月後の自分が楽しみです。

一旦、ケアマネ終了です。